

講演③

東北古代城柵の構造と機能

講演者紹介

八木 光則（やぎ みつのり）

立正大学文学部史学科卒業。盛岡市教育委員会勤務を経て、現在、岩手大学平泉文化研究センター客員教授。博士（歴史学）。専門は日本考古学。

「東北古代城柵の構造と機能」

岩手大学平泉文化研究センター客員教授 八木光則

はじめに

皆さまこんにちは、ただいまご紹介いただきました岩手県からまいりました八木と申します、よろしくお願いいたします。私に与えられたテーマ、「東北の古代城柵について」お話をしたいと思っております。今日の内容ですが時間が四〇分ということで限られております。その関係で絞った内容でお話をさせていただきます。まずは城柵の目的、それから城柵の捉え方、軍事拠点あるいは行政府なのかというそういった議論について簡単に触れたいと思っております。さらに柵囲いの集落を城柵とする説が一五年ほど前ですが出されておりますので、それについても触れたいと思っております。このような城柵の基本構造と機能ということについて前半にお話をしまして、後半では巨大化する城柵と西日本の山城との比較をメインにした話にしたいというふうに考えておりますので、四〇分間ですがお付き合いをいただきたいと思います。

一 城柵の目的

(一) 城柵の捉え方

さて、城柵の捉え方ということですが、城柵は七世紀の中頃ぐらい、飛鳥時代の中頃から平安時代一〇世紀の中頃まで、およそ三〇〇年間東北日本における国家の支配拠点として造られました。東北日本には、在地住民として蝦夷えみしと呼ばれた人たちがいたわけですが、城柵はそういった蝦夷を主に支配するための拠点という形で捉えられております。

東北地方の主な城柵を地図に落しました(図1)。東北地方の仙台市に「郡山遺跡」があります。そこから北にかけて、一番北の盛岡に「志波城」があります。ですから、だいたい仙台から盛岡までの間ということになります。一方、日本海側の方は最初に新潟平野に淳足柵ぬたり、磐舟柵いわふねというものが造

られます。それから秋田城、これが一番北端、ですから新潟市から秋田市の辺りという形になります。東北の中でも北側、青森県とか、あるいはさらにその北の北海道というのは、城柵が造られない地域ということになります。

表1は、現在わかっている城柵、記録に残されていない城柵、それと記録にはあっても遺跡として確認されていない城柵、それも含めてこの一覧に載せております。二六の城柵があったことになっておりま





図1 東北古代城柵の配置

世紀の中頃です。そのあたりから一〇世紀中頃まで、そういった形になりました。

今日は一つずつ城柵を取り上げて具体的に話す時間があると思いますので、主なところをご説明をしたいと思います。先ほどの熊谷先生のお話ともだぶるところがあるかと思いますが、考古学の立場でお話したいと思っています。

(二) 軍事拠点か行政府かの議論

城柵というのが軍事拠点か行政府かという話ですが、これは、研究史の流れの中では江戸時代から一九六〇年代ぐらいまで、征伐されるべき蝦夷という位置づけがありました。そういうイメージが強

す。造られてからずっと最後まであったかというところではなくて、最後には六つの城柵に統合されます。前半の一五〇年間、さつき三〇〇年間城柵の歴史があると言いましたが、前半の一五〇年間は新しく造ったりするような時期でした。で、どんどん増えていきました。残りの後半一五〇年は六つの城柵に統合してそれを維持していくという政策が変わっていく。平安時代の九

城柵名	比定遺跡	造営	廃絶
淳足柵	(不明)	647年	不明
磐舟柵	(不明)	648年	不明
都岐沙羅柵	(不明)	658年以前	不明
優嚙曇(柵)	(不明)	689年以前	不明
(郡山)	郡山遺跡	7世紀中葉	8世紀前葉
<玉造軍団>	名生館遺跡	7世紀後半	9世紀後葉
出羽柵	(不明)	709年以前	737年以降
多賀城	多賀城跡	724年	11世紀前葉
秋田城	秋田城跡	733年	10世紀中葉
牡鹿柵	赤井遺跡	7c末～8c初頭	9世紀前葉
(東山)	東山・壇の腰・早風	8世紀中葉	10世紀前半
色麻柵	城生・羽場遺跡か	8世紀中葉	9世紀初頭
(小寺)	小寺・杉の下遺跡	8世紀中葉	10世紀初頭
玉造柵	宮沢遺跡	8世紀中葉	10世紀
新田柵	大嶺八幡遺跡	8世紀中葉	9世紀前半
(日向館)	日向館・城山裏	8世紀	9世紀
桃生城	桃生城跡	759年	774年
雄勝城	(不明)	759年	802年か
伊治城	城生野遺跡	767年	9世紀前葉
寛繁城	(不明)	780年	不明
(払田柵)	払田柵遺跡	802年	10世紀後葉
胆沢城	胆沢城跡	802年	10世紀中葉
志波城	太田方八丁遺跡	803年	812年頃
(城輪柵)	城輪柵遺跡	9世紀初頭	10世紀
中山柵	(不明)	804年以前	不明
徳丹城	徳丹城跡	812年	9世紀中葉

表1 東北の古代城柵一覧

かったものですから、城柵というのは
 軍事拠点だと、これはもう当たり前の
 前提でありました。そして柵戸、関東
 中部地方から移民を送って、そして開
 拓あるいは軍事にあてるという「砦」
 というような理解が一般的でした。そ
 れが一九六〇年代以降、熊谷先生のお
 話にもありましたが、多賀城跡などの
 継続的な発掘調査が開始されるようにな
 ってきて、城柵についてだんだん
 はつきりしてくる。城柵遺跡をかかえ
 る自治体が競うようにして発掘を進め
 ました。その結果、築地堀が都と同じ
 ように外郭に廻る。あるいは、「政庁」
 が都を模したものということが次第に
 共通認識として理解されるようにな

り、官衙、行政の役割というものがたいへん強調されるようになりました。そのあと一九九〇年代以降になりますと、今度はちょっと揺り戻しがおきます。「櫓」などの遺構がだんだん明らかになってきます。そうしますと軍事的な面も多々あるのだということが着目されて、蝦夷支配の行政と軍事両面の拠点という理解となり、現在もずっと引き継がれています。

そういった中において、近年、近年といっても十五年ぐらい経つのですが、柵で囲った集落を城柵とする説が出されました。これは熊谷先生が、主に述べておられます。先ほど先生は時間の関係で説明を省かれたのですが、城柵というものはいくつかのパターンがあり、そういう中で柵で囲った集落も城柵の範疇に入れるべきだという説を出されました。この説は現在、主に宮城県の研究者を中心にかなり強い支持を得ていると思います。この説では外郭施設の存在、木柵であるとか、あるいは築地塀であるとかそういった外回りを囲むということがメインであって、その中身、中心に何があるかというのそれは問わないという説です。それについては、私自身がまだちょっと検討の余地があるのかなということ、保留をしているといったところです。保留というよりも、私はあまり賛成していないということなのですが、今日は東北での論争をここで繰り返してもあまり生産的ではないと思いますので、これはこれでおしまいとおきたいと思っています。

二 城柵の基本構造と機能

(一) 城柵の立地・規模

さて、城柵の基本構造です。これは先ほどから言われていますように低い丘陵、あるいは平地に立地します。決して要害の地には立地してはいないというのが大きな特徴です。規模は大きなもので八町、八町というのは一町がだいたい一〇八^ポ前後、実際の施工では伸び縮みがありますので一〇〇^ポから一一〇^ポぐらいの誤差があるのですが、だいたい八四〇^ポクラス、小さいものですと三五〇^ポぐらいというような規模のものになっています。ただし、一時的に巨大化する城柵があることもだんだん分かってきました。これは後半の話にしたいと思います。

(二) 城内の諸施設

一 外郭線

図3は城柵の典型例としてよく使われる多賀城跡です。丘陵を取り込んで、周りをやや不整形ですが方形に、正方形に囲おうとした意識があると思います。実際には丘陵を取り込んでいますから、必ずしも直角にはいきませんが、だいたい方形を意識したのだろうと思われます。で、中央に政庁を置いている。周りには門を置いています。南門が南側にすでに確認されています。それから東門も北側の方ですが確認されている。そして西門がずっと南のほうに下がっておりますが図のような形です。東門から西門に至る道路もあったと推定されております。写真1は上空から見たところで

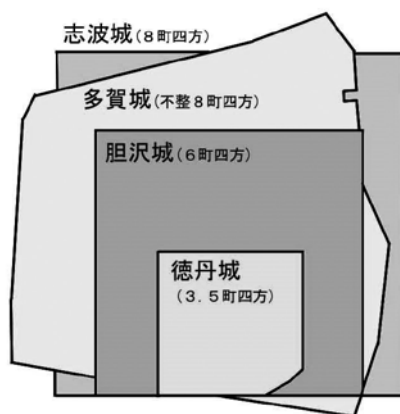


図2 主な城柵の規模

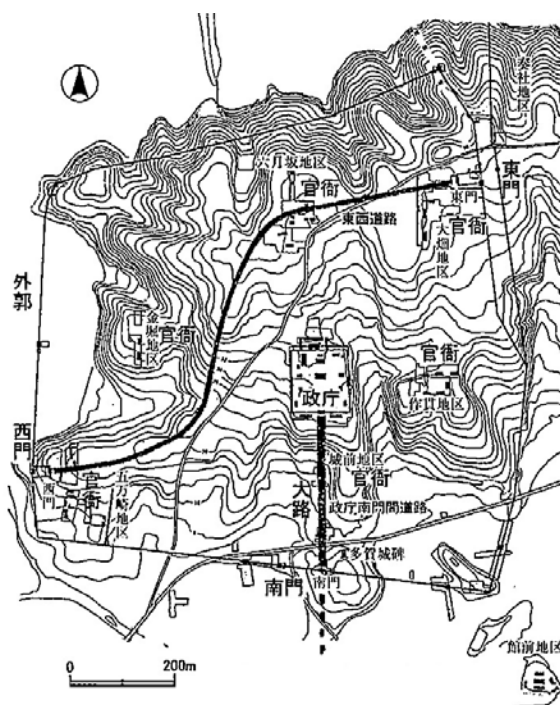


図3 多賀城跡

(高倉敏明 2008『多賀城跡』同成社 図40 から転載)

す。あまり高い丘陵でないことは一目瞭然ですね。先ほどの鞠智城のスライドを見ておりましたら立地が比較的似ているのかなと感じました。もしかすると鞠智城と城柵の接点を考えるとすればこういった地形が多少関係するのかもしれませんが。ただ、これが西日本全体の山城全部の類似点につながるというわけではないことを申し添えておきたいと思います。

規模を比較してみます(図2)。多賀城はだいたい八町四方、不整ですけども八町四方であろうと考えられます。また、これに匹敵するのが一番北端にありました盛岡市の志波城がほぼ八町四方です。また、それから少し小さくなるのが岩手県の胆沢城です。これが六町四方、一番小さいのが徳丹城、これも岩手県なのですが三・五町四方です。だいたいこのぐらいの規模の範囲で城柵というものが造られております。実際には不整形であつたりしますが、このような規模の範囲に収まっています。

二) 政庁

政庁というのは城柵には不可欠な施設です。だいたい全体の中央付近、あるいは少し南のほうに寄つたところに政庁を配置しております。政庁はいうまでもなく城柵の中核になるということになります。政庁の建物の基本的配置は正殿、それから東西の脇殿が片仮名の「コの字」のように配置されています。先ほどの國下先生のお話にもありましたが、都の内裏をかなり小さくしたようなミニチュア版としてこういったものが造られていることになります。このことは基本的には城柵全て共通します。図5の多賀城でも正殿があつて西脇殿、東脇殿がありますが、そのほかにそれぞれ両脇に別の施設、あ

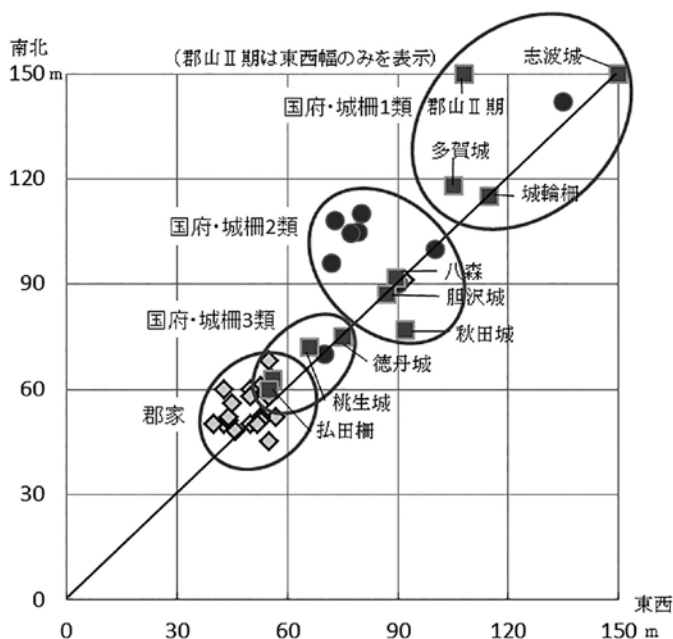


図4 政庁の規模

るいは後殿と呼ばれるような施設もあったりします。これは城柵ごとの個性として表われます。

多賀城の場合には南門があり、築地塀で周りを囲むという形です。そのほかにも例えば胆沢城では「板塀」という、やや簡素な区画施設を持つ例もあります。いずれも政庁というのは、きっちりということも大きな特徴の一つになっております。

図4は政庁の規模をグラフに示したものです。政庁の規模は大きく分けると三つに分類ができます。一番大きい城柵は、一辺が一五〇メートルぐらいの規模になっています。その一番大きいのが志波城で、一五〇メートル四方です。昔の尺でいいますと五百尺、一尺が三〇センチとして五百尺というこ

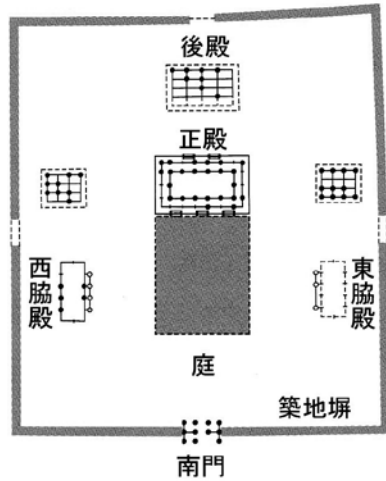


図5 多賀城跡の政庁（平安時代初期）
（宮城県多賀城跡調査研究所 2010『多賀城跡 政庁 補遺編』第56図に加除筆）

るいは陸奥の国の国府の規模になるといことになります。志波城は、国府ということではないのですが、それに匹敵するぐらいの規模を持っているということは、やはり注目されると思います。

それから次のランクになります。胆沢城と秋田城がだいたい九〇メートル級のランクです。三〇〇尺前後ということになります。この三〇〇尺のランクになる胆沢城というのは国府があったわけではなくて、少し別の組織なのですが、「鎮守府」というものが置かれたところです。秋田城は鎮守府ではないのですが、おそらくそれに匹敵する規模ですので、鎮守府に相当するような役割を与えられていたのではないかなと思います。それから三つ目、徳丹城、桃生城、あるいは弘田柵というような文字が書かれておりますが、これはだいたい二〇〇〜二五〇尺、六〇メートルから七五メートルぐらいのランクがあ

とになるわけです。そして多賀城も百二十メートルぐらい、四百尺です。多賀城には陸奥の国府がありました。それからその上のほうに郡山Ⅱ期とありますが、これが多賀城の前身の陸奥国府だといわれています。城輪柵は、固有名詞がわかっていないので遺跡名から城輪柵と言っているのですが、山形県酒田市にあります。つまりこの一二〇メートルから一五〇メートルというのは出羽あ

ります。これはかなり小さなものになってくる。もう一つ小さなランクを楕円で囲っておりますが、「郡家」の政庁です。徳丹城跡などは郡の役所の規模にほぼ匹敵するぐらいですね。ですから、その管轄範囲もおそらくは限られたものであろうというふうに考えられます。このように政庁の規模を分類することによって、それぞれの城柵に与えられた管轄範囲であるとか、役割であるとかそういったものを推定することができるのではないかと考えております。

三) 官衙Ⅱ曹司

それから城柵の中には官衙という建物がたくさん造られています。歴史的な用語でいえば曹司と呼ばれたりします。政庁周辺などで主に実務をとる建物群、そういったものを官衙といっております。これについては、それぞれの城柵で独自性がありまして、城柵の個性が表れるといったところなのかなというふうに思っております。多賀城は丘陵の平坦部ごとに独立的な官衙群を配置している。これが明らかになっております。図3をみてわかるように、それぞれ丘陵の平坦部に独立的な官衙を造っている。具体的にどういう役割を果たした役所なのかはわかりませんが、いずれもそれぞれその任務を負って造られた官衙であろうと思われます。

そういった中でこれから胆沢城をご紹介したいと思います。図6のように胆沢城というのはこのような正方形です。六町四方、六七〇¹四方の規模です。平坦部にありますのでこういう四角の平面形が取りやすいということもあつたのだと思いますが、本当に真四角です。その中央より少し南に政庁

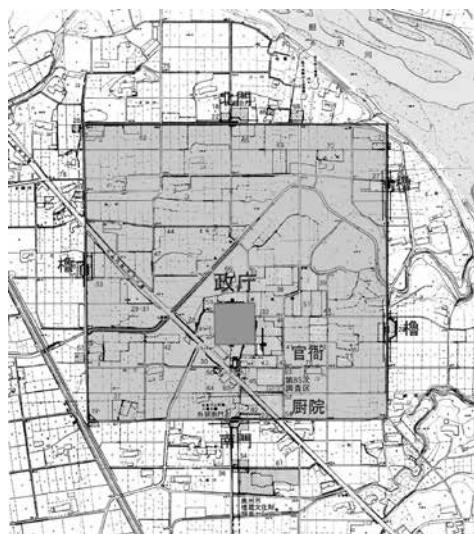


図 6 胆沢城跡

(奥州市教育委員会 2006『胆沢城跡—平成 16 年度発掘調査概報—』第 1 図に加除筆)

設です。これがあるのが城柵の大きな特徴ですね。そういう意味で軍事的な意味合いがあるというふうになるわけです。

また「官衙」に話を戻しますが、政庁の周りに官衙というものが造られています。図 7 の左側は九世紀の前半、この胆沢城というのは西暦八〇二年、九世紀の初めに造られています。そのときの状態というのが左側の図です。政庁が左上のほうに見えるかと思えます。板塀ですのでそんなに立派な囲いではないですが、その中に正殿があつて東脇殿が確認されています。また西脇殿が発掘されていないのでここには描いていませんけども、おそらく西脇殿もあるだろうと。で、問題はその外側、北東

があります。それと先ほどの外郭のところであり詳しくお話しませんでした。外回りには櫓が三カ所確認されています。実際にはもつとあったと思いますけれども今、発掘で確認されているのはこの三カ所です。

これは城柵特有の施設、物見櫓、敵が攻めて来るかどうか、兵士がこの上に立って見張りをする。あるいは、攻めてきたら弓矢で射かける、防戦するというような、そういう役割を持った遺構、施

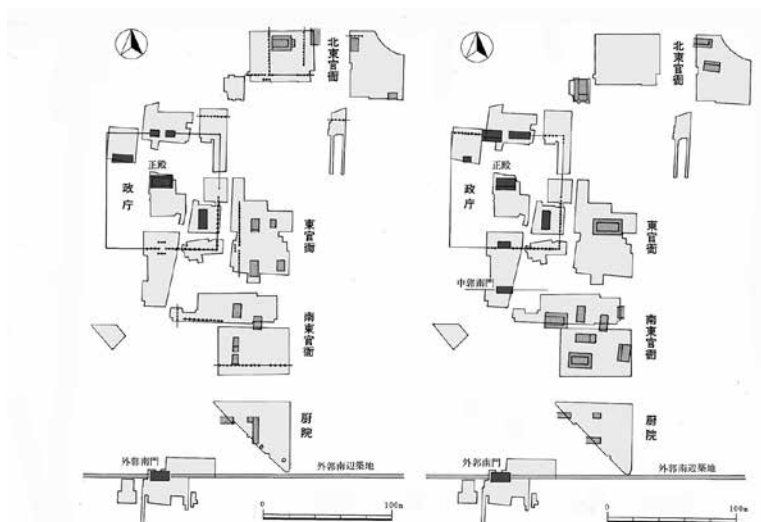


図7 胆沢城跡の官衙（左 9世紀前半、右 9世紀後半

官衙であるとか東官衙、南東官衙と書いていますが、そういったところにそれぞれ独立的な官衙、役所を置いています。それぞれの官衙をやはり板塀で区画をしている。ですから独立したような形となっております。

この官衙を見ていきますと、北東官衙はちょっと例外的なのですが、東官衙や南東官衙には南北に細長い長方形の建物が見えると思います。これが9世紀の半ばから後半になって図の右側のほうに変わってきます。政庁のほうも若干の変化はありますが、官衙が大きく変わります。まず東官衙、南東官衙は今まで南北に細長かったものが、東西に細長くなる。建物の棟方向が東西を向くようになる。そして建物の周りに「廂」をつける、建物とすれば大きくなる、あるいは格が上になる。外観もおそらくは最初、切妻のような比較的シンプルな形から入母屋というような、やや複雑な屋根構造になったりする。そういうふうにな

変化します。と同時にこの周りからは、灰釉陶器であるとか、あるいは中国から輸入した白磁、青磁というようなものがたくさん出てきます。これは左側の段階、九世紀の前半にはほとんどありません。ですから、南東官衙あるいは東官衙で行われている内容が変わってきたと考えられます。結論を言えば、おそらくは饗宴などの宴を開いていたのだろうというふうに考えられます。それは灰釉陶器だとか白磁には皿とか碗が多いので、そのように考えられるわけなのですが、これは当時、城柵に与えられた役割の一つとして蝦夷をもてなすという、そういう役割があったことを裏付けています。もてなすという言い方がちょっと唐突でわかりにくいかもしれませんが、地域に住んでいた蝦夷、東北の蝦夷たちがこの胆沢城にやって来るのに手ぶらでは来ない。その土地の特産物を持って来る。貢ぎ物を持ってやって来る。それに対してこの胆沢城で饗宴を開く。そして、物であったり、あるいは位階、名前とかそういったものを与える。そういう、相互に利益があるようなことが行われていました。それを行ったのがこの南東官衙あるいは東官衙であろうというふうに考えられます。

九世紀の中頃に変化した理由は、一つにこの北側にあった志波城あるいは徳丹城という城があったのですが、それが九世紀の半ばぐらいになくなってしまいました。そして、今の岩手県域では唯一の城柵として胆沢城だけの一城になってしまいます。ですので、おそらくはそういった北からの蝦夷たちの朝貢、貢ぎ物を受けるといった役割を一手に引き受ける。そのために、こういった構造に変化したと考えられます。このような官衙の在り方はそれぞれの城柵によって変わるということは先ほど申した

通りです。

(三) 寺院

一 多賀城廃寺

それから城柵には附属寺院というものが造られます。多賀城廃寺、具体的には固有名詞、観世音寺であるとか、そのような名称があったのでしようが、発掘した当時はわからなかったので「多賀城廃寺」という名前がつけられています。多賀城附属の寺院として多賀城の近くに寺院が設けられました。建物は礎石建ちです。大宰府の観世音寺と同じ伽藍配置を示すということも確認されています。

二 秋田城廃寺（鶴ノ木地区寺院・図8）

それから秋田城にも附属寺院が建てられていました。この場合には掘立柱建物です。礎石建ちではなかったのですが、今、推定されているものは金堂があったり、その北のほうには講堂、または僧房と思われるものがある。その中間両側には経蔵や鐘楼も確認されています。金堂の西側には幢竿といわれる幡を立てた柱の跡も見つかりしています。このような附属寺院があったことが確認されています。

それと一緒に水洗の厠も発掘されています。これは便槽がありまして、その脇に桶か甕なんか置いていたんでしょう。用を足したあとは杓ひしゃくで流すと、それが北側のほうに沼がありますのでそこに流

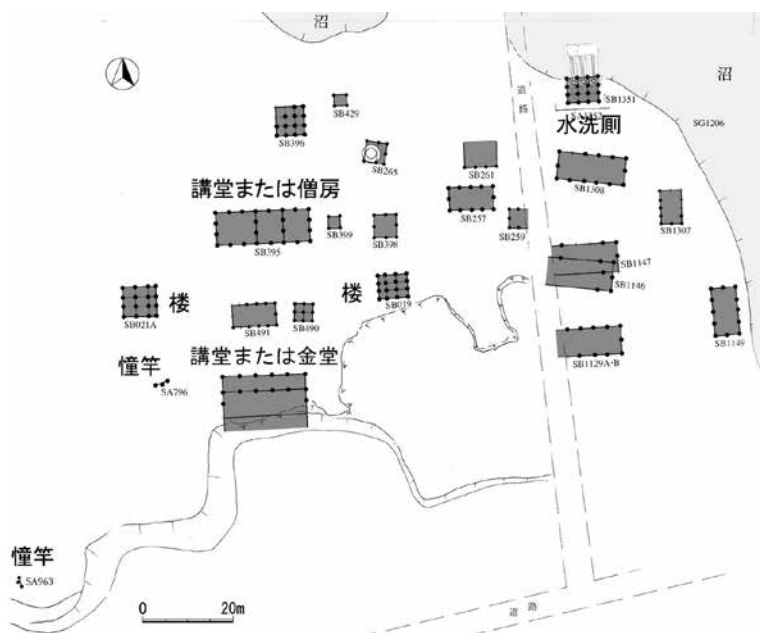


図8 秋田城鶴ノ木地区の寺院跡（奈良時代）

（秋田市教育委員会 2008『秋田城跡～鶴ノ木地区～』第159図を編集）

れるようになっていく。そういう水洗の廁がありました。で、その水洗の廁の土を分析しましたら、有鉤条虫という寄生虫が確認されました。それは、豚や猪に寄生するものだ。だから、日常的にそういった豚などを常食としている人たちがここで用を足したのではないか、日本ではまだその頃、豚を常食するということはないものですから、そこで考えられたのは中国大陸、今の朝鮮半島の付け根辺りから北の方に渤海（ほっかい）という国がありました。その渤海からの使者が秋田城にやって来たのではないかという、そういうことを示す水洗の廁ですね、廁の寄生虫はそれを示しているのではないかと思います。熊谷先生は、いや渤海使は秋田城には来てないよ、という別の

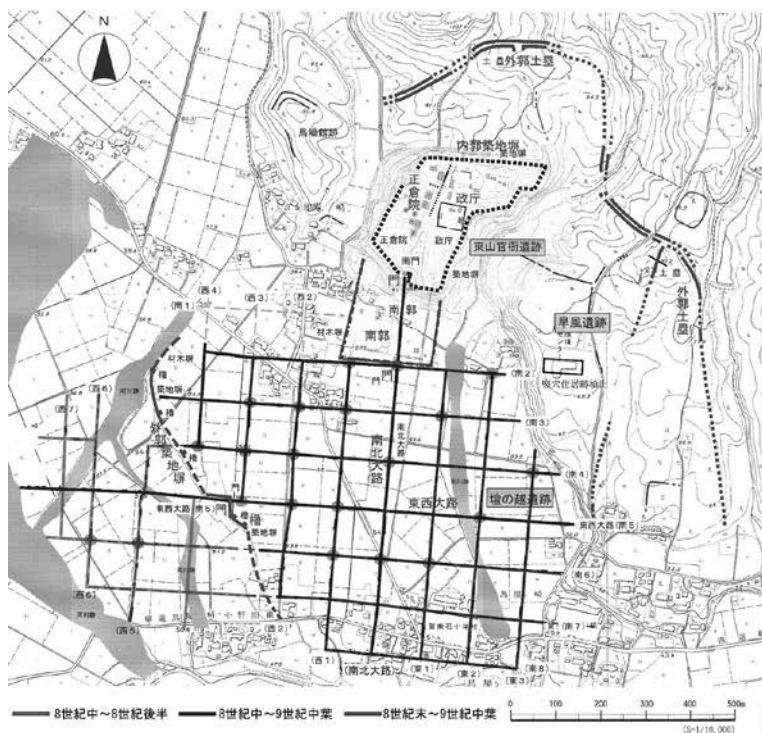


図 9 加美町東山・壇の腰・早風遺跡全体図（8 世紀末～9 世紀中葉）
（加美町教育委員会 2008『壇の腰遺跡 XV』図版 125 を編集）

説を出されておりますが、それはともかくとして、そういう説もあるというところをご紹介しておきたいと思っています。

駆は足ですけれども城柵にはこう
いったようないろいろな施設が造ら
れたということをお話し申しあげま
した。次は城柵が巨大化する後半の
話に移っていききたいと思います。

三 巨大化する城柵

(二) 大崎平野(宮城県北部)の
城柵

まず、図9は宮城県加美町にある東山遺跡です。点線で囲った部分が東山遺跡と呼ばれている部分です。内部に政庁があります。その西には



図 10 大崎市玉造柵跡（宮沢遺跡）全体図

（古川市教育委員会 1993『名生館官衛遺跡ⅩⅢ』第 1 図をもとに編集）

正倉院と呼ばれる倉庫群があり、この政庁と正倉院その構造からここは郡家、郡の役所であるということがわかります。ただ、この周りを囲っている点線の部分は築地塀です。これは郡家の構造にはない、郡家の区画施設ではなく、城柵の構造であるということから基本的に、東山は城柵であるという、共通認識がなされています。またおよそ八世紀の中頃ぐらい、奈良時代の真ん中あたりに南側の平野部に碁盤の目のような方格地割が造られます。都のような区画が広い範囲にできます。図の薄い色の西側部分にもつくられます。それが奈良時代の終わり頃から平安時代の初めにかけて築地塀ができます。そして櫓が建てられる。それから門が建てられる。この築地塀ができたときに、築地塀より西側部分は廃

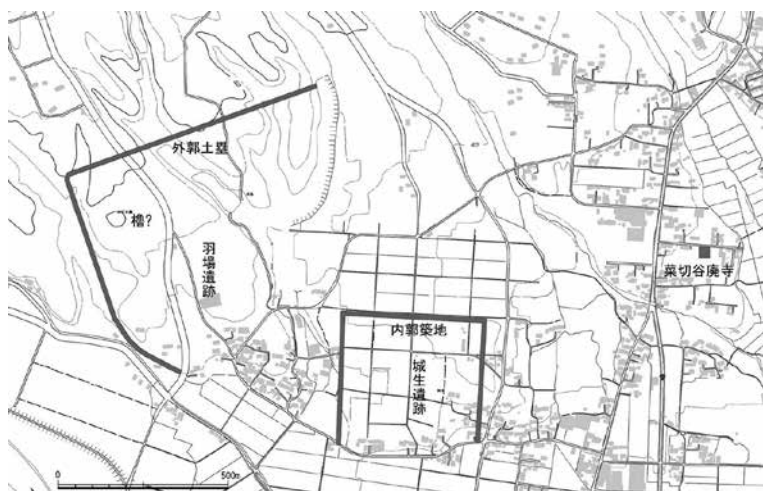


図 11 加美町城生遺跡全体図

棄されます。築地堀から内側に取り込んで、取り込まれた部分が、その後も継続します。さらには北側の方にも土塁が新しく設けられ、全体の規模は東西二二〇メートル、南北一四〇メートル以上となります。こういう大きな変化が、八世紀末あるいは九世紀の初めに起きているのです。

次に大崎市にある宮沢遺跡をとりあげます。発掘した面積が非常に少ないので、遺跡の性格であるとか年代などについては議論がまだ定まっていらないのですが、中央に内郭と呼ばれるような区画がありそうだということがわかっています。このあたりで発掘を何ヶ所かで行っているのですが、八世紀の中頃、奈良時代の中頃の時期のものが出ています。役所で使うような硯であるとか、あるいは蓋付きの碗であるとか、そういったものが出てきますので、このあたりは八世紀の中頃から官衙として機能していた可能性が高い。これが九世紀になると大きな範囲が土塁や築地で囲まれるようになります。先ほど



図 12 大崎市新田柵跡

(田尻町教育委員会 1998『新田柵跡推定地』第2図をもとに編集)

の東山遺跡のように最初は小さかった。それが九世紀に東西一五〇〇メートル、南北一三〇〇メートルに拡張されるという同じパターンが見られます。

似たようなものに、その隣の城生遺跡(図11)といわれるところがあります。同じように本体の部分の周囲に年代がはっきり確認されていないのですが、やはり外回りを大きく区画する時期があるということがだんだんわかってまいりました。

新田柵跡はこれも同じ、少し東のほうにいったところですが、同じような例がわかってき

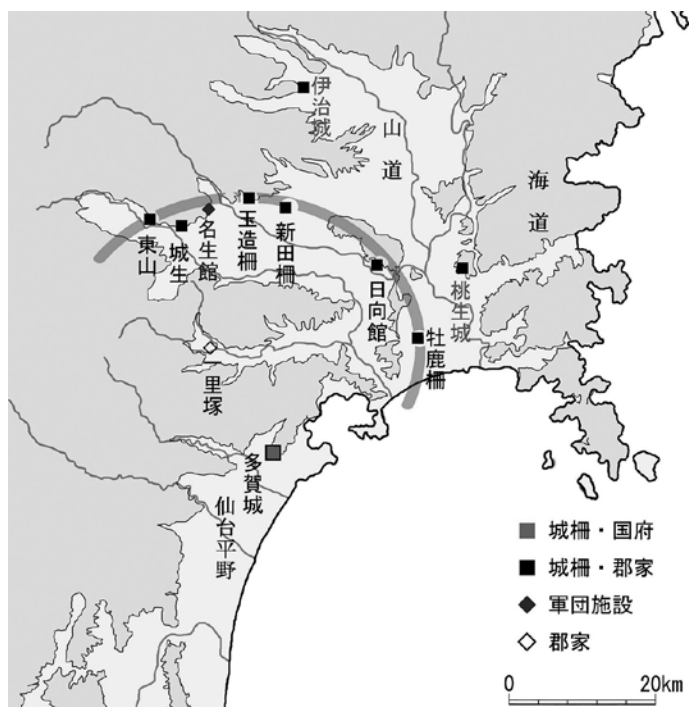


図 13 大崎平野の城柵群（東山～日向館遺跡）

ています。それらを地図（図 13）に落
しますと、西から東山遺跡、城生遺跡、
名生館みょうだてというのはちよつと置きまし
て、玉造柵・宮沢遺跡、それから新田
柵、あるいは日向館ひなただてというところ
が分かってきました。これらを結ん
でみると、円弧を描くような形、その
中心はどこかという多賀城です。多
賀城を扇の要とする扇端のようにみえ
ますので、多賀城を防衛する「扇端防
衛ライン」と私は名付けているわけ
ですが、こういったようなネットワーク、
城柵のネットワークというのが作ら
れているのです。

（二）横手盆地（秋田県内陸部）

次に秋田県の弘田柵遺跡をみてみま

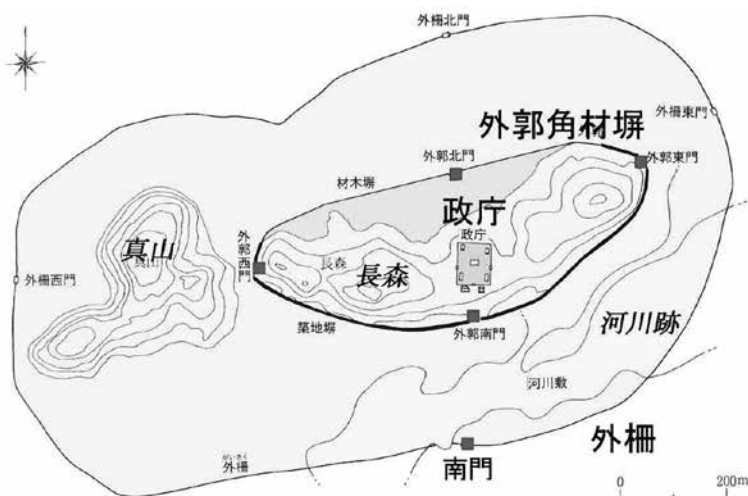


図 14 大仙市払田柵遺跡全体図

(秋田県埋蔵文化財センター 2009『古代城柵と蝦夷』9 ページ図に加除筆)

す。今まで見た地域とはちよつと離れます。この払田柵(図14)というのは、八〇二年に造営された城柵です。今まで見てきたのは八世紀の半ばに造られたものが、九世紀の初めぐらいに拡張するという事例です。ここでは、九世紀の初めに造られ、最初から拡張されています。一番外側に外柵があります。外柵というのは低湿地に角材を立て並べたものです。その内側に外郭があり、北側に角材が並べられています。外郭には櫓が伴います。外側の外柵には櫓がない。ですから、本来的な城の外郭というのは、内側の外郭線になります。外柵のほうはある意味では見せかけの外回りということになります。これは非常に大きい。東西一・三キロの規模です。

(三) 三十八年戦争

こういった巨大化する城柵ができる時期は、実は東北地方で中央政府、国家側と蝦夷との戦いが三十八年間

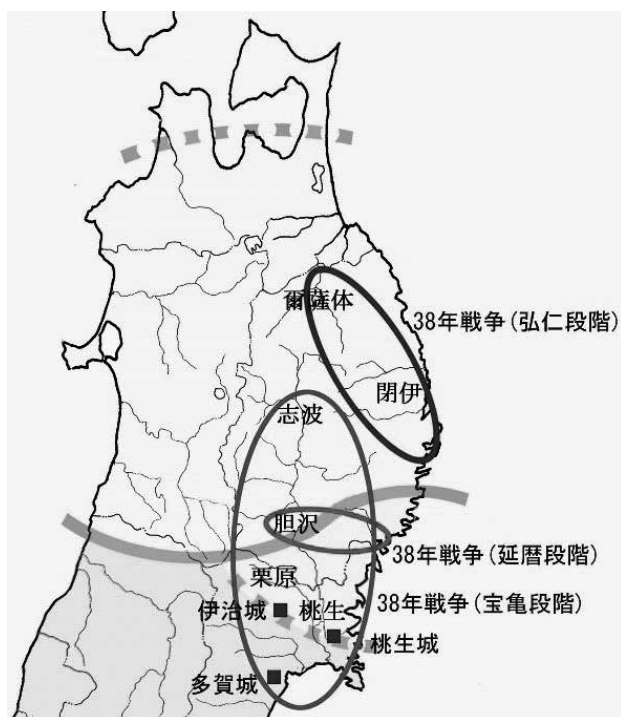


図 15 38 年戦争の対象地域

に及ぶ「三十八年戦争」と呼ばれる大きな戦争の時期にあたります。最初は七七四年、宝亀五年に海道の蝦夷たちが桃生城を襲撃します。発掘でも政庁の建物跡の焼けた跡が実際に確認されています。海道の蝦夷というのは、海側にいた蝦夷というふうにお考えいただきたいと思うんですが、それから数年後、宝亀十一年、伊治公これはりのきみあざまろ皆麻呂あぜちという人が、按察使あぜちの紀広純きのひろずみを殺害した。中央政府側の、現地のトップの役人を殺してしまった。殺しただけではなく、おそらくは大きな合戦もあったんだろうと思います。

そして、伊治城これはり、多賀城を焼く。多賀城を焼いたということは、陸奥の国

府を焼いてしまったということです。非常に大きな出来事になるわけですね。先ほど申しあげた多賀城を守る「扇端防衛ライン」というのは、こういった多賀城を含む城柵が焼き討ちにあったという、そういう衝撃を受けて巨大化したものになったんだろうと思われます。三八年間に及ぶその後の戦いもあります、今日は、これにはあまり触れないでおきたいと思います。いずれにしても国家側は、城柵の巨大化を行って多賀城を扇の要とする扇端防衛ラインを強化したと考えられます。

おわりに

なかなか西日本との比較ということまで申しあげることができなかったのですが、こういった城柵のネットワークというものは、例えば九州からあるいは瀬戸内海にかけての西日本の古代山城のネットワークと通ずる何かがあるのではないかなというふうに思っております。また巨大化するのには城柵本体を守るために外郭を大きくして、そして実際にはそれが軍事的に本当に意味があるかどうかはともかくとして、見せかけでもとにかく大きく作ろうということがかなり大きかったのではないか。先ほどの鞠智城のお話の中で、官道から見えるところだったでしょうが、土塁を造るときに、そちらの方を立派に造ったということがありました。それは見せるための土塁というような意味合いもあったのだろーと思います。東北の城柵においても同じようにそういった見せるということが巨大化の大きな要因ではないかなというふうに思います。どうもご静聴ありがとうございました。